

私若年^二而相続仕候処、翌未敏四月村方宇右衛門倅直二郎と申者
出願^〆事発、村方^〆申出候^二者…(中略)

…兎角少々の干魃^二も右分水^〆も水為曳不申、或者出水之節^者分
水堀捨候等と、毎々村方^〆故障申立、農業差留め、毛付等相後レ、
年々作り劣り、御年貢等指支、誠以当惑支候、何卒先年之通上下
古井手^〆水曳、田作相成候様奉願上候、

(下ヶ紙)

「本文奉願上候私田地^江相掛り候谷井用水之儀^者、往古村方日損
急水所^二而、多ク畑地之場所^二御座候処、先祖左太夫大庄屋相
勤候節、寛文五巳年二月從御上新溝普請被仰付、遠井之谷^〆三
田村^江堀継候井溝^〆落候谷井用水^二て御座候、其節村方過半田
作仕候様^二相成候儀^二御座候、右に付^而者新溝^〆落候谷井用水
〆銘々分ヶ当テ田作仕候^而も、少シも田土^〆仲間^〆彼是申儀^者無
之筈と奉存候得共、私田地^江水曳候儀、本文得申上候通、私宅
人水料村方^江差出し候儀、誠^二難渋仕候、勿論私百姓株永々之
難題^二も相成、歎ヶ敷奉存候、何卒御賢慮を以株式難題^二不相
成様被為成下候ハ、冥加至極難有奉存候、此段御許容之程奉
願上候、

*堀江亀之助あて三田村左大夫願書(堀江家文書)の一部。なお表紙貼付ラベルに
は湯子家文書432と記されている。三田村新溝と谷井用水の関係が示され、且つ三
田村新溝の造成年代が分かる。

【二】笠松家の由緒と系図

(一) 由緒書

29 笠松家先祖由緒書 天保八年(一八三七)

豊中市 笠松高信家文書

南龍院様御入国之御後、寛永年中保田家由緒之者依 御尋、乍恐
私先祖笠松左太夫家系之儀奉申上候処、保田三助一族保田三郎左
衛門重郷為嫡孫儀、達上聞、広浦於 御殿御目見被仰付、其節郡
御奉行所名取弥次右衛門殿・鈴木権左衛門殿^〆山保田大庄屋被仰
付相勤候、役中清水村・久野原村式ヶ村之内田畑日損急水之場所
^二而作物難出来、年々百姓共傷弱り、家を潰し、田畑を上ヶ、大
勢他所^江奉公稼^二罷出候^二付、前々^〆御普請奉願、御見分被成下
候得共、所々難所御座候^而、御普請難被成趣に付、何卒自分働ヲ
以、譜代召抱候下人又^者村々百姓共^江申談、普請仕立見奉申上度
奉願候処、願之通被仰付、昼夜精出シ骨折候^而普請成就仕、於両
村^二高五百石余日損急水を救ひ候様相成、右申上候通之弱人百姓、
段々呼返シ、家共相続為仕候、此段郡御奉行衆御吟味之上被仰達
被成下候^二付、極難所之所結構普請出来仕候段、御誉被遊候由
^二而、御褒美新田之場所被下置、猶又清水村^二而荒地自分開^二仕
候様被仰付、御請奉申上、六町余新田出来仕、畝高^并定免^二被仰
付、則御証文被下置、其後山中筋御為^二可成儀、并百姓共難渋仕
候村々吟味之上、日損所急水所昼夜精出シ普請仕立、山保田^二而
十三ヶ所井水仕掛、且^者新池等出来数多、日損を助ヶ候付、新田
并畑返り共村々^二数多出来、且又承応・明曆年中清水村之内蘭嶋・
小峠・小原^与申所、右三ヶ所斗代反^二付四斗盛、定式ツ取^二被仰
付、御証文左太夫^江被下置候、都合於清水村^二惣新田八町八反余

開発仕、新田・本田畑・茶畑共十四町余、外二草山・薪山等七拾町余所持仕候、右家督悴共江讓分ケ、遺状ニも郡御奉行鈴村市左衛門殿、村井久太夫殿、則御加判被成下候候事、尤承応三年三月七日ハ悴佐左衛門江大庄屋被仰付、親左太夫後見ニ而父子相勤候、扱於 御国御領分紙漉出し候土地無御座候ニ付、先達而被 仰出候得共、紙漉方知り候者無御座候趣、郡 御奉行遠藤兵左衛門殿ハ御談御座候而被仰付候、依之佐左衛門役中父子兩人者種々相考苦勞仕、漸吉野ハおまんと申女、紙漉方覚候者ニ而、召抱候処、中九寸・長七寸之生漉紙、外二品々都合七色初而出来奉差上候処、殊之外御珍重ニ被思召、御鼻紙御用ニ相立候趣ニ而、万治弍年極月紙屋御取立被仰付候に付、清水村之内小峠与申野山芝地を見立、紙や屋敷切開キ、清水村枝郷ニ取立、家式拾式軒開基仕、大勢之者召抱紙漉伝授仕、親左太夫儀者次男弥之助召連、彼地小峠江隱居仕、紙漉渡世相成候様取立仕候処、追々紙御仕入方被成下繁栄仕候、則 御国産紙発端ニ而尔今御仕入御下ケ被為成下候御事ニ御座候、其節万事御用掛寺嶋孫右衛門殿ニ而御座候、万治三年二月広浦於御殿父子共御目見被仰付、御金拝領仕、且願之一卜通者御聞届被為成下候様との蒙 御意候、猶又御普請場入用紙御仕入方など、銀米毎々御下ケ被下置、猶又寛文七年佐左衛門儀宰相様就 御家督、和歌山於御殿御目見仕候、同八年正月廿七日於西御丸御能拜見被 仰付、同年二月宰相様広浦御成、同所於御目見被仰付、銀錢拝領仕候、翌寛文九年十月佐左衛門儀病死仕候付、右佐左衛門悴左伝幼少ニ付、同入弟七九郎江御用被仰付、右左太夫後見ニ而相勤候処、左太夫儀寛文十三年病死仕候付、右七九郎貞享年中迄相勤、佐左衛門悴佐伝成長仕候付、佐左衛門与改名、貞享四年ハ大庄屋被江被仰付相勤候間、右七九郎村方之内江分家仕罷在候、左伝事佐左衛門役中元禄弍年組下松木御赦免願之通被御仰付候、同五年高野騒動之節、

郡御奉行衆山保田板尾村御堅メ之砌譜代下人召連相詰、高野領柳瀬之庄・花園庄・新之庄・大瀧迄村々御取上ケ之武具、鎗弓長刀鉄砲等不残受取、御城下江持参仕御用相勤メ候、然ル処元禄十年先祖左太夫役中出来候新田筋之儀ニ付、御奉行所之奉成御苦勞ニ、後同年五月佐左衛門風与家出仕、奉恐入候処、郡御奉行衆之御取計を以、所持山林田畑傍示町間并家財等御改被成下候処、佐左衛門家出之躰乱心同前之儀ニ而、且数代役儀被仰付御用相勤候御由緒を以、与藏願之通家督其儘佐左衛門悴与藏江被下置、尤与藏幼少ニ付、五ケ年之間伯母智大藏村田中三之丞可致後見様被仰付、猶与藏幼少ニ付、每暮御年貢并与藏家内諸勘定於大庄屋元ニ是又可致旨被仰付、与藏家督御改帳面江、御役人衆堀内八藏殿・河嶋四郎太夫殿・田所平左衛門殿御加判被成下候御儀ニ御座候、大庄屋之儀者前嶋喜太夫方江被仰付候得共、家督一跡被下置候段冥加至極難有奉存候、与藏十七才之暮迄田中三之丞与藏宅江引移り後見相続仕候、与藏十八歳ニ相成り佐左衛門与改名、右家督三之丞ハ改受取相続仕候後、

常憲院様就御七回御忌御法事、雲蓋院様依願三浦遠江守様ハ親佐左衛門御国御赦免被仰渡候趣、堀内八助殿ハ被仰候儀ニ御座候、与藏事佐左衛門相続中享保六年_丑年六月、田尻村権兵衛御尋之砌、地士六拾人之代御役人衆橋本久右衛門殿・吉田才助殿ハ被仰付、山保田遠井村江譜代之下人召連相堅メ御用等相勤候、其後寅年大惠院様熊野江御社参之御砌、広於井関村御目見仕候、然ル処享保十七_子年殊之外凶作、田方虫付候ハ譜代下作之者数十軒余潰レ候ニ付、御未進仕、難洪罷成候、此段宝曆七_丑年奉願候処、代々由緒有之家之儀ニ付御聞届被成下、格別之御賢慮を以御免合御用捨被成下、其趣御証文被下置候御儀ニ御座候、然ル処、同人老衰仕候付隠居仕度候処、男子無御座、遠井村前嶋次郎右衛門親類ニ付、同人次男私娘江智養子ニ仕、家督相続為致、養父佐左衛門隠居仕

候後、安永五^甲年病死仕候、養子左太夫相統中寛政六^寅年

觀自在院様熊野^江御社參二付、御目見奉願候処、願之通被仰付候御

儀二御座候、且又天明五年以来凶作統二付、追々御未進出来、先

祖所持之田畑山林共多分他^江壳払、其上病身二^而、同人悴左伝次

江家督相統為致隠居仕候後、享和三年病死仕候、右左伝次相統中、

必至難洪仕、毎度御未進など差支、是又山林田畑共壳払、終二相

続行届不申、無余儀家屋敷少々之田畑等村方^江差出候二付、小峠

林之右衛門^与申者村方^右株跡引受暫相続仕、村庄屋相勤候内村

方池御普請奉願候由二御座候、然ル所、同人相続行届兼、又候、

村出し二仕候付、村方之内覚之右衛門^与申者又々引受相続仕候得

共、是迎も同様之儀にて村出し二可相成所、私親左伝次第二^而源

内^与申外家^江參百姓仕罷在候得共、右躰実家之成行如何ニも歎ケ

敷奉存、何卒先祖血脈相承相続仕度奉存候付、実家^江罷歸り左太

夫二改相続仕候得共、右等難洪成行候跡式引受候儀二付、村方納

得之上切分ケ下ケ免奉願候処、願之通被仰付候御儀二御座候、親

左太夫儀文政五^午年死去仕候付、私相続仕罷在候処、近年打続凶

作二^而必至難洪仕候得共、百姓取続家相続仕来候段、全ク先祖^右

代々御憐愍被為成下候御儀^与重々難有奉存候、

南龍院様御入国以来毎々厚御慈悲を以御取立被為成下候、私家代々

相続仕来候間、何卒別紙内存願之通、先祖由緒断絶不仕様、重々

御慈悲を以宜御取扱被成下候様幾重ニも奉願上候、以上

五月^酉
*平出部分は、欠字扱いとした。

他に、奥書に「明治十五年八月、勸業係^右書御尋二付、其節写し置候也、

笠松惣太郎」とある。ほぼ同文の無表題冊子（笠松俊男家所蔵）がある。

有田郡山保田組三田村

願人

左太夫

(二) 系図

30 保田大系図 文政一一年（一八二八）頃

豊中市 笠松高信家文書

人皇五十六代

∴清和天皇——（十五代中略）——長宗

重宗

保田山城守長宗次男保田三助、紀州有田郡山保田惣分地頭、清水八幡山城主、天正十一年志津^{（奥）}ヶ岳合戦討死、

重郷

保田有馬利宗長男保田三郎左衛門、天正十一年清水八幡山居城落去之砌、三助重宗娘為介抱、日物川村高垣又右衛門立退、後姓改笠松、文禄二年^辰八月十五日卒、

重次

保田有馬守利宗次男保田彦八郎、清水八幡山落城之砌討死、

重之

保田三郎左衛門重郷長男笠松源三郎、父死去之後三助娘卜二人旧臣大蔵村田中氏養育、慶長元^丙年三月三助娘婚交、三田村住、

紋 大渦流
三蓋松

重吉

笠松源三郎重之嫡子笠松左太夫、誕生慶長八^癸卯年正月十五日
徳河大納言頼宣卿紀州入邦後、寛永四年名取弥二右衛門・鈴木権左衛門以吹挙保田家再興、広浦於御館御目見、山保田大庄屋被仰付、勤茲、役中組下久野村千弁才天山斗^{（計）}二渡井^一ヲ、日損所新田畑五百石余開、其外山中於村々井関築、新溝新池数多、畑返新田成ル、後

從 頼宣卿為褒美藏米三百俵被下置、至承応二年清水小峠新田、明曆元年同蘭嶋かると測新田、同二年同小原芝新田右三ヶ処全新田二百六十石余開発、御証文三通被下置、承応三年嫡子笠松佐左衛門依定大庄屋勤之、往古以来干國中紙漉之無土地、依テ万治二年七九寸生漉紙於笠松家漉出、始テ献上、同年極月紙屋御取立被仰付、同三年三月十四日広於御館御目見、御金拝領御懇蒙上意、寛文元年清水小峠つふら野草創紙屋廿二軒開基、同三年同所諸役免許、則御証文被下置、後与三弥之助一小峠隠居紙屋御用務之、保田八舛盛新田開発、産物御上紙発端、小峠草創紙屋開基之祖、保田家中興笠松姓元祖也、

道円禪定門

寛文十三^癸 丑 六月十九日卒、行年七十六歲

秋月妙円禪定尼

寛文十二^壬 子 七月八日死、行年七十歲、田中喜兵衛娘

依定

重吉長男笠松佐左衛門、誕生元和六^庚 申 十月十一日

承応三年^甲 午 三月七日保田大庄屋田所平左衛門・丹羽安太夫於御宅被仰付、尤是迄大庄屋二人^二而相勤之処、向後老人可勤之旨、弥百石三文目宛役徳被仰付、万治三年三月十五日於広御館御目見、御金拝領、同五年三月七日芝田四郎兵衛取次御金拝領、同七年就宰相様御家督若山於御殿六月八日御目見、同八年正月廿七日於西御丸御能拜見、同年二月朔日広浦^江宰相様御成銀錢拝領、勝誉浄安信士

寛文九^己 酉 十月十七日没

薰屋妙安禪定尼

延宝三^乙 卯 正月三日死、湯川庄司茂右衛門光重娘

頼重

実ハ重吉次男笠松七九郎、

寛文九^己 酉 年后十月廿七日村井久太夫・岡村市太夫・寺嶋孫右衛門三方連名^二而大庄屋被仰付、佐左衛門嫡子幼少ニ付左伝成長迄勤之、貞享四^卯 年大庄屋左伝渡シ、後別家三田村住、慶譽道論居士 宝永五子年六月十八日没 浄貞妙論信女 正徳五申年五月六日死

笠松弥之助

重吉三男小峠分家、

賢雲浄春信士 貞享四^卯 正月十七日、没行年二十九才

一豊

依定男笠松佐左衛門、誕生寛文五^己 六月廿日幼名左伝、

貞享四^卯 年大庄屋被仰付、元禄二組下松木御赦免、同三年久野原床山・四村谷山立木被下置、同五年高野山騒動之砌、普代之下人百余人召連板尾村相固メ御用勤之、元禄十年五月大庄屋退役、後入道是空^下云、正徳四年^甲 午 十一月御国御赦免

阿闍梨了性 享保十二^丁 未 五月七日没、行年六十三歲

覚誉妙光信女 正徳四^甲 午 九月三日死、遠井村前嶋喜太夫娘

慈光院妙閑信尼 享保十八^癸 丑 二月六日、若山大井六之進息女

子 早世 浄光童子、寛文二^寅 五月七日

女 登久 妙金信女、享保二^酉 正月十六日

女 伊磨 田中三之丞嫁、春月妙還禪定尼、天和三^亥 二月廿七日

女 多計

女 磨佐 前嶋喜太夫嫁

女 佐治太夫 小松弥助嫁、妙心信女、享保三^戌 正月三日

住于三田村

西岸道祐信士、享保十三^甲九月廿七日

女^八 奈可 早世 長夜妙幻童女、元祿五^甲天八月廿七日

女^九 富久 清信 前嘉左衛門嫁、妙蓮信女、七月十日

女^十 佐右衛門 別家 住干小峠、道夢信士、九月廿八日

岡右衛門 住干若山、蓮德心悅信士、正德五^未六月晦日

笠松笹之助 住干小峠

笠松左平太 住干小峠

笠松小平次 住干三田村

之治

一 豐長男笠松佐左衛門、誕生元祿六^癸二月十一日幼名与蔵

元祿十年十月願之通伯母聳田中三之丞後見父佐左衛門家督御改、田所平左衛門・河嶋四郎太夫・堀内八助三方御加判被成下、十八歲正月^{ヨリ}家督三之丞二請取相続、享保六^丑六月田尻村權兵衛御尋之砌地

士六十人之代役被仰付、譜代之下百余人召連、遠井村口相固メ御用務茲、大納言宗直卿熊野御社參之砌、広於井関村御目見、涼山退休禪定門 安永五^丙十一月三日、行年九十五才没

夏月妙休信女 安永八^己亥七月十日

女^一 羽根 早世 昨夢童女、元祿七^戌八月十九日

女^二 文啓 幼名与吉、諱本教房、享保十九^寅四月十日

女^三 龜六 真崎定七、榮樹道昌信士、延享三^寅六月五日、

女^四 寿免 栗生村岩橋武兵衛嫁、妙光信女、宝曆四^戌六月十九日

女^五 登与 早世 知法童女、宝曆八^寅五月十六日

女^六 早世 智清童女、享保十八^丑七月廿四日

女^七 早世 元夢童女、宝曆十^辰六月十九日

重定

之治嫡男笠松左伝、贈佐左衛門、本空清光信士、行年十一歲、享保五^庚子六月廿三日早没

榮直

之治養子笠松佐太夫、実前嶋次郎右衛門次男

寛政六^寅年十一月、中納言太真卿熊野御社參之砌、宮原村二^而御目見被仰付

正学貞眼居士 享和元^辛酉五月二日没

曜室貞讚信女、明和九^壬辰五月十一日死、笠松左太夫之治二女竹、行年四十三歲

女^三 早世 智清童女、享保十八^丑七月廿四日

女^四 左奈 三田村 中峰新七嫁、春月妙真信女、明和九^辰年正月八日死

女^五 紋 三田村 林忠右衛門嫁、雲峯妙榮信女、寛政九^己四月十七日

女^六 路久 小出善之丞嫁

女^七 志知 楠本村 今北八之丞嫁、貞覚妙真信女天明六^午年十一月十五日

女^八 文 三瀬川村 平助嫁

海靜 名嶋村能仁寺弟子、後四村中原村、善福寺一代

女^七 佐平次 自性円周信士、文政十三^寅十二月五日

女^八 左和 三田村 沢田佐左衛門嫁

笠松覚之右衛門

女^一 奈可

頼宗

榮直九男源内笠松左太夫、誕生明和元年四月十八日

秋蓮覺往信士 文政五年七月十九日没、行年五十九歳

湯川村弁右衛門三女寿那、行年(六)

頼国

頼宗長男金吾、笠松左太夫、誕生寛政九年卯九月五日

下湯川福井友助娘富左

慶治

清水村
一 沢儀右衛門養子

実存

誕生享和三亥八月二日、幼名八三郎

清水八幡别当清水寺諱順浄房、法印権大僧都和尚位

覚猛

誕生文化五戊申七月十一日、幼名与蔵

高野山千蔵院弟子諱義天房、法印権大僧都和尚位

孟辰

頼国長男敬蔵、誕生文政四巳年正月十三日

女

逸栄

女

多計 早生、妙女童女、文政十一子八月廿日

31 小峠笠松家系図

寛政八年(一七九六)頃

岸和田市 笠松俊男家文書

笠松左太夫

一 正永

南龍院様御普請役ニ被召出、御米六百五拾三石出シ、川井関新溝拾四筋堀、五百石余ノ日焼ヲ留、新田畑返リ多ク、久ノ原村ニ而た多株十式軒子孫之者呼返シ、相続仕らせ候、小峠御開起仕リ、保田紙元発、橋本御発ニ而被仰付、取立仕リ申候、大守米三百俵御合力米被下、嶋・小原・小峠新田場八十余町拜領仕、百石高御引被下、山保田組大庄屋役相勤申候、行年七十八、寛文十三みづのとの丑ノ六月十九日死、法名道円禪定門

依之

山保田大庄屋役

佐左衛門

一 豊

元禄十迄大庄屋役

佐伝

正次

万治二年三田村下垣内二生、母ハ湯川大家ノ庄司娘、清水小峠ニ住ス、実遠井村前嶋十左衛門娘、貞享四年丁卯正月十七日、行年廿九才玄雲浄春、三田村庄屋役相勤

笠松弥之助

正宗

笠松惣兵衛

若名想太郎

母前嶋氏

実遠井村古市平八娘、行年八十四、宝曆七丑ノ五月四日濃法妙心

観月道寿信士、行年八十八才、明和二乙酉ノ七月八日

宗之

武州江戸死

弥平太

女子

オサン

沼源右衛門成光宝

瑞雲院晴霞妙良、行年八十二

宗清

三田村庄屋両度相勤、小峠庄屋役相勤

同 惣兵衛

実、二沢村山家同心中山左右衛門二男

宝、寺原村地士六十人者保田権太夫娘

宗忠

女子三人

惣四郎

ヨリ
オコ
オサン
東楠右衛門宝(巻)
中嶋七右衛門宝(巻)
三田村庄屋役両度相勤、小峠庄屋相勤
法名律真院惠照居士、行年六十九歳、寛政八辰ノ十一月九日死

居福 小峠庄屋役相勤
母保田氏
宝湯子川村海瀬喜太夫娘(巻)
小峠観音堂取立
女子二人
宗光 若山死
八幡宮神主寺原村 湯子兵太夫宝(巻)
日物川村 利助宝(巻)
同 惣助
実ハ正宗子也

宗之
惣太郎
とよの
ことよ
楠松
小さの

32 亀田大隅守直状 慶長六ノ元和五年(一六〇一ノ一九)

湯子家文書(折紙)

已上、

重而申遣候、彦左衛門ひらき之分、おわらら二有之田はた共二神主弥兵へ二預候て、御八幡之御くうたうミやう(燈明)、宮の御用ニめしつかい候様ニ可被成候、此分ハ清水村の高の外ニ候条、うち人ニ能可被申聞候、委ハ伝八・市之進申渡候、恐々謹言、

九月廿九日 亀田大隅守
権太夫殿 参 高綱(花押)

*近世初期浅野時代に、小原の一部がすでに開発され、検地で把握されたが、「高の外」として八幡社に免許されたことが分かる。なお、他の亀田大隅守文書と筆跡・花押が異なり、いずれも、今後の検討が必要である。

33 亀田大隅守寄進状一 慶長一〇年(一六〇五)頃 湯子家文書

御八幡御寄進之物成
一上畠 六石四斗四升 年々八幡神主作 二つ分け
一屋敷 式石八升 年々八幡別当作 古城ノあと
一茶 四斗八升 同人作 つほ之内
一中畠 七升三合 同人作 同所孫八分
一中畠 壹斗五升六合 し(巻)は 大日の右
一下畠 三斗九升二合 し(巻)は 八幡にわ
一屋敷 三斗 し(巻)は あせち
一中畠 六斗六升三合 し(巻)はうへ木あり 神主分
一辻堂 壹斗四合 村中
右之通申付候間、書付之通万事御八幡御用ニたち候様ニ可仕者也、

慶長十〇年八月十五日 大隅守 高綱(花押)

神主
甚右衛門
権大夫
久右衛門
助左衛門
四郎右衛門 参

34 亀田大隅守寄進状二 慶長一三年（一六〇八）

湯子家文書

御八幡御寄進之物成

一上々畠 米式斗

一下々畠 米式石四升

合式石二斗四升 □ひ□米て

内

老石二斗九升 正月の八月中まで御供米、納升つき代とも

式斗八 納升由之代（通カ）

老斗八 御まつりのとき馬のり新右衛門二可遣様

老斗八 いち二可遣様

残五斗五升 御まつりの時馬のり新右衛門・いち・かて（勝手）候のふるまひ（振舞）二可仕候

一道源ニハ四村之庄下として公事仕、家別二一間にて夏麦一升、秋

米壹升つゝ集て可遣者也、

（慶長）十三ノ五月五日

大隅守（花押）

喜右衛門

神主

甚右衛門

権大夫

半助

久左衛門

助右衛門

四郎右衛門 参

覚 控

〔端裏書〕

一有田郡之内清水村ニ附（附カ）独罷有六拾人者保田伝八、

一大御所様（御之）何二（而）も無御座候、

一大納言様御入国以来為御扶持御米六拾石、先保田権太夫同子同様

三代被為下渡頂戴仕候、其後御扶持御赦免之、以来為御拝領権太

夫二銀子拾枚御米拾俵、銀子式枚御米拾表頂戴仕候、

一中納言様御代二御次目御礼御（儀カ）御目見へ仕候、其後御米拾俵

為御拝領頂戴仕候、今至御目見仕候、以上、

天和四年子ノ二月

保田伝八

富永伝之丞様

岡山勘七様

36 土地寄進状 貞享二年（一六八五）

湯川久弥家文書

八幡宮奉寄進田地之事

小原上ノ段

一新田式畝歩 高八升

右之田地永代奉寄進所也、此以料物累年八月二、護摩壺座為御法楽

被致修行、并毎月壺十五日夜之灯明を神前へ可被進者也、意趣者万

民安穩子孫為繁榮、仍寄進如件、

先保田権太夫孫

湯河加左衛門

貞享貳年丑霜月

阿闍梨融盛

ひかへ

35 六十人者保田伝八の覚書 天和四年（一六八四）

湯川久弥家文書

37 土地寄進状 貞享三年（一六八六）

湯川久弥家文書

奉寄進田地之事

小むかい地ノ内
一下々山田式畝歩 高八升

御年貢之儀者作人ノ伝八方へ
請取、御公儀へ納可申答

右之田地永代八幡宮奉寄進所実正也、此以料物毎年正月二、護摩壹座為□法楽可被致修行者也、右之旨趣者氏子繁昌、諸人快樂、子々孫々為除災与楽宛□所如件、

貞享三年丑正月

保田伝八

(他九人、略)

八幡宮時別当
阿闍梨融盛

ひかへ

38 保田権太夫由緒書 貞享三年(一六八六)

湯川久弥家文書

先保田権太夫由緒書之事

一先保田権太夫若年之時者湯河庄司九郎と申、親兄弟一所二居申候、保田三助友宗公安瀬河之庄清水城御住宅被為成候と云、友宗公越前之やなかせ陣二而打□被遊、此跡目二弟花王院様相不替入城被為成、其節湯河庄司九郎ヲ保田伝八と御名字御救被為下置候、其時分清水水村堀江十郎左衛門跡、東と申本家友宗□御取上ケニ而有之、花王院様〆保田伝八ニ被為下置候事、浅野但馬守様御代ニ罷成候節、御家中ニ亀田大隅守殿、山保田先給人ニ而、清水村へ御居住被遊候、先保田権太夫田地之内御屋敷御家御立被成、数年式拾年合御居住被遊候、其内ニも保田権太夫ニ諸事御公用之儀被為仰付候事、

一浅野但馬守様あきの広島へ御国替之刻、亀田大隅殿同所御国替へ被成候、則此屋敷跡保田権太夫ニ不相替当テ被為置、今に所持仕候事、

一大納言様御入国之砌、保田権太夫ニ御国六拾人役被為仰付、為御

扶持米六拾石頂戴仕候、不々凶々御奉公仕候事、

一先権太夫八拾三才ニ而相果、後ノ権太夫跡役之御奉公不相替相勤申候、其後御扶持御赦免之、以来

大納言様〆為御拝領と御米銀子頂戴仕候事、

一中納言様御代ニ罷成候、以来御拝領被下候、先保田権太夫以来、同子・同孫三代頂戴仕候事、

一中将様御祝言之御入輿之為御いわひ、わか山御会所ニ而御酒被為下、貞享三年丑年、後之孫伝八頂戴仕候御事、

右之通跡々孫々へ相達申候由緒仍而如件、

先権太夫傳ノ

保田権太夫

先権太夫孫

同 加太夫

貞享三年寅三月日